

子どもたちの人権作文

学校で人権について学んだ児童生徒のみなさん。自らの経験を基に記した「人権に関する作文」について、代表作品をご紹介します。

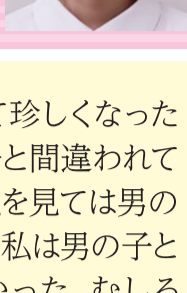


中学生の部

自分らしさ

創徳中学校 2年

岩崎 彩羽さん



今は制服を着るようになって珍しくなったが、私は小学生の頃よく男の子と間違われていた。初対面の人は決まって私を見ては男の子？と言う。否定はするものの、私は男の子と間違われることが嫌ではなかった。むしろかっこいい物の方が好きだったし、女の子が身に付けるようなかわいらしいものを好むタイプではなかった。なにより、自分が女の子らしい格好をすることに違和感があった。だから、親戚に言われた「女の子らしく」という言葉を聞くたびに嫌な気持ちになり、スカートやワンピース、かわいらしいものがどんどん嫌いになっていった。でもそれは小学生の頃、数年前の話であって、中学生になり制服でスカートを穿くようになって私の女の子のもの嫌いもずいぶん落ち着いた。

そんな私は小学5年生のある日、LGBTQという言葉を知った。「LGBTQ」は性的少数者を指す言葉で、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クエスチョニングの頭文字を表している。同性愛者の人、異性同性どちらも好きになることができる人、体と心の性が不一致の人、性自認や性的指向が定まっていない人。当事者の人たちの体験談や辛かった話を聞いて、私にとってあたりまえでいたって普通の事や、私たちが発する何気ない一言にとっても苦しめられているということを知った。しかし、当時の私に当てはまるものはなく、少しもやもやしていた。もっと深く調べていくうちに私はXジェンダーという言葉を知った。Xジェンダーとは、男性、女性のいずれにも属さない性自認を持つ人のことを指す言葉であり、当時の私にとって一番しっくりくる心の性だった。自分の心の性がはっきりした気がして、自分だけじゃないんだと思えた気がして、嬉しくなった。しかし、当時の私のようなLGBTQ、Xジェンダーを受け入れてくれる人はいるのか。そう多くはないと思った私は親にも自分の心の性について言えずにいた。

誰かにとっての普通が自分の普通とは異なる。「普通」とは一体何なのだろうと思うと、世の中おかしいことだらけだ。性的少数者のことを完全に共感することは難しいと思うが、理解はしてほしい。私たちはみんな違う人間だから一人も同じ人はいない。だから、セクシャルマイノリティーが特別なものじゃなく、とても自然であたりまえ、人それぞれ心の性は違うということ全員に理解してほしいと思う。

今の時代、13人に1人がLGBTQに当てはまると言われている。身近な人にも、私が知らないだけで当てはまる人がいるのかもしれない。どんな心の性を持っている人にとっても、生きやすく優しい社会にするために、髪が短いから男の子、スカートを穿くから女の子、といったような概念はもう当てはまらないということを知ってほしいと強く思う。女の子らしく、男の子らしくではなく、自分らしく。全員が自分のことをもっと深く理解し、自分らしさを大切にしていってほしい。

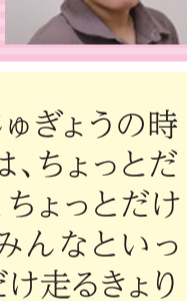
今の私は、体と心の性は一致していると思う。環境や体、考え方感じ方が変化すると、心の性も変化していくものだと思う。体も心も女の子だと思っている今の私も、男の子にも女の子にもなりたくなかった昔の私も、どちらも「自分」だ。どちらの自分も大切に、今後、もっと全員に優しい社会になるような行動をしていきたい。

小学生の部

やさしい人になりたい

旭が丘小学校3年

加藤 遙太さん



ぼくは足が悪い。ふつうのじゅぎょうの時は、何もこまらない。体育の時は、ちょっとだけ出来ないことがあるけれど、ちょっとだけルールをかえてもらったら、みんなといっしょにできる。みんなは、ぼくだけ走るきよりが短くなっても、もんくを言ったり、いやな顔をしたりしない。だから、ぼくは体育も、楽しくできている。

ぼくのクラスの人、ぼくにとてもやさしくしてくれる。特にAさんは、ぼくのことをいつも気にかけてくれる。いつも、まっばづえで歩いているが、この前、教室でこけてしまった。そのとき、Aさんがすぐに来て、助けにきてくれた。こけることはなれているけれど、すぐに助けてくれて「だいじょうぶ」と声をかけてくれて、とてもうれしかった。

車イスにのって帰る時、Aさんが、「いっしょに帰ろ。」と声をかけてくれた。ぼくは、とてもうれしかった。だからAさんのランドセルをぼくがかかえて、Aさんがぼくの車イスをおして二人で帰った。いつもの帰り道だけど、二人でいろいろな話をしながら帰ったのが楽しかった。

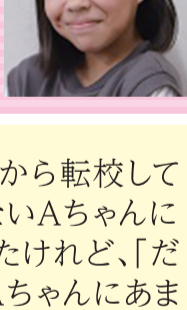
Aさんは、ぼくのことを親友と言ってくれた。ぼくも、Aさんのことを親友だと思う。

ぼくは、みんなにやさしくしてもらっている。だから、ぼくもやさしくしてもらっただけじゃなくて、人にやさしくできる人になりたい。

Aちゃんのおかげ

一ノ宮小学校6年

佐藤 素晴さん



5年生の3学期、スリランカから転校してきたAちゃん。日本語が話せないAちゃんに助けが必要なのは分かっていたけれど、「だれかが助けるだろう」と私はAちゃんにあまり関わろうとしなかった。

6年生も私はAちゃんと同じクラスだった。「ぬくぬくタイム」でAちゃんの作文が紹介されたとき、Aちゃんが「みんなと一緒に帰りたい」「休み時間も一人でさびしかった」という思いをしていたことを初めて知った。何で今まで話しかけなかったんだろう、しゃべる機会はいっぱいあったのにと、激しく後かいた。今まで話してこなかった分、いっぱいしゃべりかけて、日本語を早く覚えてもらい、自分がAちゃんの力になろうと心にちかった。一番に「親友」という存在になろうと決心した。

その日から、積極的に「お腹すいたなーAちゃんはどう？」「猫が好きなんだ、私は犬が好きだよ」などと自分から話しかけた。Aちゃんがきよろきよると何か困ったことがありそうなときは「大丈夫？」「分からないところある？」などと声をかけてきた。全校集会のときは、B君と協力してAちゃんにも楽しんでもらえるよう、身ぶり手ぶりでクイズの問題を説明した。

ある日、Aちゃんから「そうじの場所、教えて」と声をかけられた。声をかけられて本当にうれしかったし、何よりAちゃんにとって私は声をかけられる、安心できる存在になってきたのかなと感じ、心がじわっとあたたかくなった。「ここだよ」と教えたら「ありがとう」と笑顔で返ってきた。Aちゃんの力になれたことも、少しずつ日本語を覚えていることもうれしく思えて、話しかけ続けてよかったと思った。Aちゃんは「すばる」と私の名前を呼んでくれた。

それから、英語を教えてもらったり、楽しくおしゃべりしたりして過ごす時間が増えていった。Aちゃんの写真も少しずつ増え、その笑顔を見るたびに、もっと増やしたいと思った。自分から声をかけることで、仲良くなっていった。私の気持ちがAちゃんに届いたのかなと思ったら、思わずにやけてしまった。

人見知りだからとか、他の子がしゃべりかけているからとか人に押し付けてばかりの私だったけど、ほんの少し勇気を出して関わってみたら、仲良くなれるんだなと気付くことができた。こうやって気付くことができたのは、Aちゃんのおかげ。これからも、Aちゃんから話しかけてもらえる回数が増えるよう、私から関わっていく。